平成29年3月31日発行

名古屋女子大学

24号

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所主任　吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

「大人になったら何になりたい？」と聞かれ、子どもの頃のあなたは何と答えていたでしょうか。実際になれた人もいるでしょう。また、別の夢や希望を抱いて進んで行った人もいるでしょう。思い出して下さい。その思いにはその頃の自分のいた環境と時代背景が大きく影響していたはずです。第一生命株式会社による第28回「大人になったらなりたいもの」調査（2017年１月６日）によると、女の子の１位が食べ物屋さんで、男の子の１位がサッカー選手となっています。男の子の憧れは、昔は野球選手だったものが、今はサッカー選手となり時代がうかがえます。注目は、女の子の２位の保育士・幼稚園の先生、３位の学校の先生、そして６位のデザイナーです。子どもたちの夢は、必ず将来へとつながりこれからの日本の社会へと現れていくでしょう。名古屋女子大学の教育においてもこうした、子どもの頃に抱いた夢の実現への流れとして生きているように思えます。名古屋女子大学・短期大学部を巣立っていく学生も、子どもの頃に抱いた夢にむかってこの大学で学び、次の世代の子どもたちに夢を与える人となっていくはずです。そのための教育を支える様々な研究が、この総合科学研究所で行われています。平成28年度の研究と地域貢献事業は、幼児教育、女子教育、そして大学での学びと、子どもたちの夢を紡いでいくための研究となっています。これまでの、そしてこれからの総合科学研究所での研究が、子どもたちの夢の実現への手助けになることを期待するものです。

「大人なったらなりたいもの」調査の男の子の第２位は学者・博士でした。ここ数年の日本人のノーベル賞受賞が影響しているということですが、「研究者」が子どもたちにも肯定的に見られているということです。科学研究は大変ですがやりがいがあり、楽しさもあります。この思いが、子どもたちの夢を将来の研究へとつなげ、より社会を豊かにしていってくれることでしょう。

平成28年度「開かれた地域貢献事業」報告

短期大学部生活学科：石﨑智恵利・武岡さおり・成田公子・原田妙子・阪野朋子・松本貴志子・森屋裕治
短期大学部保育学科：大嶽さと子・河合玲子・児玉珠美・平井孔仁子・幸 順子　家政学部食物栄養学科：片山直美・田辺賢一
文学部児童教育学科：倉田 梓・渋谷 寿・堀 祥子・村田あゆみ・吉川直志・吉田 文
名古屋女子大学同窓会「春光会」：川北仁美・千葉史子・松田尚美・吉田嘉子

本研究所が推進している「開かれた地域貢献事業」として、地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所の両公共施設とのコラボレーション事業は、10年目の節目を迎え、平成28年度を無事終えることができました。瑞穂児童館との交流事業は、保育・教育、栄養・生活関係で12の講座と、児童館クリスマスイベントで５つの企画を行いました。特に今年度は、瑞穂児童館と本研究所との間において「瑞穂区地域子育て支援に関わる講座実施における協定書」による協定を締結し、地域社会の子育てを支援することを目的とした講座が開催されました。瑞穂保健所との交流事業では、今年度から参加対象者が広がり、より多くの地域の方にご参加いただける機会が増え、５つの企画を行いました。これらは、春光会、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部生活学科・保育学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所の教職員が協力して実施し、多くの方に参加していただきました。今後とも、地域の方々と触れ合う機会を多くご提供し喜んでいただけるように、またこれらの事業に関わる学生たちが実社会の中で成長する場面を多く提供できるように、取り組んでまいります。

（文責：森屋裕治）

1 名古屋市瑞穂保健所との交流事業

平成28年11月～平成29年２月
平成28年度 一般介護予防事業「若返りきらきらセミナー」
「オリジナルＴシャツつくり」「絵手紙をかこう」「ストレッチ＆エクササイズ」「懐かしい童謡や唱歌を歌いましょう」「カラフルロールケーキつくり」

2 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

クリスマスイベント「第８回 みんなでメリー・クリスマス！」
平成28年12月10日（土）・11日（日）
「クリスマスのオーナメントクッキー作り」「みんなでクリスマスを楽しみましょう」「クリスマスパーティーがはじまるよ／サンタさんとメリークリスマス」「クリスマスのペーパークラフトをつくろう！」「サンタさんのロケットを飛ばそう」
交流事業の各種講座　平成28年８月～平成29年３月
「マザリーズ教室1・2」「親のメンタルヘルスについて考える」「ちょうどよい食事量ってどれくらい?」「親子で楽しむ音楽あそび」「『プログラミン』をつかってアニメつくり」「だるまちゃんとあそぼう！」「木材を利用したおもちゃづくり」「カラフルロールケーキづくり」「子育て教室」「回してみよう！」「乳幼児対象食育相談」

ストレッチ＆エクササイズ

カラフルロールケーキつくり

マザリーズ教室

みんなでメリー・クリスマス！

機関研究　「創立者越原春子および女子教育に関する研究」
～女子教育の継承―戦前から戦後へ―～

歌川光一㈹・河合玲子・児玉珠美・佐々木基裕・遠山佳治・藤巻裕昌・三宅元子・吉川直志・吉田 文

平成28年度から開始となった六期目は、越原春子先生の建学の精神、教育理念を踏まえて女子教育をとらえていく共同研究と、越原春子先生の功績を視野に入れた各メンバーの専門分野に基づいた個人研究の二本立てで、学際的に研究会を進めています。

共同研究においては、学園七十年史編集委員会編『学園七十年史 春嵐』（学校法人越原学園・学校法人名古屋女子大学発行、1985年）以降の学園の沿革を辿る作業として、学報における学校情報の整理やそれに基づく関連教員へのインタビュー等を計画しております。個人研究に関しては、毎回２～３人の担当者が、専門性に基づいた研究を報告しています。旧制高等女学校から高等教育へ、という戦前から戦後にかけた女子教育界の動向を見据え、教育学、歴史学に留まらず、社会学、家政学、音楽学、体育学といった多様な観点から研究を進展させています。

（文責：歌川光一）

機関研究　「大学における効果的な授業法の研究７」
～学生が主体的に学修する力を身につけるための教育方法の開発～

歌川光一・佐々木基裕・渋谷 寿・白井靖敏・杉原央樹・辻 和良・遠山佳治㈹・羽澄直子・服部幹雄・原田妙子・野内友規・三宅元子・吉川直志

本研究は平成27年度～29年度の３年間かけて行うものであり、本年度は２年目に当たります。学生が主体的な学修を行うための授業法の研究を目的としています。

本年度は、昨年度に学生に対して実施した「主体的な学修および学習に関する調査」について、その調査結果をまとめました（『総合科学研究』11号掲載）。また、各学科におけるFDへの取り組みに関する発表・情報共有を進めました。

なかでも、「授業法の研究」に資する各種資料・情報の収集を目的として、各種学会・シンポジウムへの参加を積極的に行いました。例えば、平成28年12月３・４日にかけて行われた大学教育学会2016年度課題研究集会では、森本あんり国際基督教大学・学務副学長による講演があり、学生のアクティブな思考を、授業内および外部から測定可能な方法でのみ評価することの危険性について議論が展開されました。来年度は、調査の分析結果と収集した資料・情報をもとに、具体的な授業方法の開発を行います。

（文責：佐々木基裕）

機関研究　「幼児の才能開発に関する研究」
～絵本の読み語り～

幼児保育研究グループ

今年度の主題「豊かな言葉の獲得」の一環としての絵本に焦点を当てて研究を進めています。そこで、子供たちの絵本の世界を広げるために、年齢ごとに様々な分野からの絵本を検討しました。

選択のポイントとして、3歳児では、季節行事を分かりやすく伝えるものや昔話の紙芝居などを中心に考えました。４歳児では、興味を持ち始めた自然に関する図鑑や友達シリーズの続きとなるものを選択しました。また、５歳児では、長編の物語や今まで親しんできた話の続きとなるものに、さらに世界地図など年長としての探究心の芽生えに応じた内容のものに注目しました。それらの絵本が媒体となり、子供たちの世界の広がりに結びつけられるよう取り組んでいます。

（文責：森岡とき子）

平成29年度機関研究
「食と健康に関する研究」

本研究では、ヒトの一生を通じて食物の物性や栄養面について、体の構造・生理、主として消化器系との関連を幅広く追求し、消化器系を通じても、主たる項目として考えられる咀しゃく運動と栄養吸収との関連や、咀しゃく・消化活動と脳を中心にした諸器官活性化との関連等を探っていきます。

特に、「食育」の立場から地域との関係を重視して、実践的活動を組入れた研究活動を展開していきます。この地方の健康促進に貢献するため、栄養面や咀しゃく運動の重要性などをわかりやすくまとめた「食育」に関する冊子の作成をすすめていく予定です。「食育」については、栄養教諭のみならず全教員が知識として持つべき事項であると考えますので、教職課程に関連する教員を含めた幅広い連携を図り冊子の作成をすすめていくことを計画しています。

（文責：駒田格知）

プロジェクト研究　「系統性と連続性をもった音楽教育のメソドロジーの開発」
～ミュージック・リテラシー向上のために～

稲木真司㈹・歌川光一

日本の義務教育においては、小学校・中学校と少なくとも９年間は音楽の授業を受けてきているにもかかわらず、高校生から一般成人の音楽の読み書き（ミュージック・リテラシー）の能力を見ると、基礎的な読譜もままならない状況になっています。これは音楽が算数や漢字のように系統性と連続性を伴う「積み重ね」によって教えられていないことが原因となっています。本研究では、これまで、現行の音楽科教科書を比較分析し、小学校の６年間で教えるべき音楽的内容（共通事項）を論理的に系統立てて、容易な内容から段階的に難しい内容へと連続的に教える方法について探ってきました。さらに、音楽教育が進んでいると言われているハンガリーの教科書との対比により、現行の日本の音楽科教科書、および学習指導要領で示されている共通事項の範囲や取扱いについての課題が少しずつ明確になってきました。今後も引き続き日本の音楽教育に求められているメソドロジーを構築するための研究を行っていきます。

（文責：稲木真司）

プロジェクト研究　「乳児接触における学生のマザリーズの学習効果に関する研究Ⅱ」
～音声ピッチに焦点をあてて～

児玉珠美㈹・大嶽さと子・神崎奈奈

本研究の目的は、平成27年度のプロジェクト研究を継続し、乳児接触におけるマザリーズ表出の実態調査及び表出困難者に関する音声分析調査を通し、マザリーズ表出が苦手な学生を対象とした学習効果を明らかにすることです。

平成28年度４月より、１学年86名の学生のマザリーズ表出の現状調査後、31名の学生を乳児対象グループと人形対象のグループに分け、マザリーズ指導を２回実施し、その前後に０歳児対象の絵本読み聞かせ音声を録音しました。本物の乳児と人形との学習効果をマザリーズの表出程度で比較します。前年度の研究において、マザリーズの特徴の中でもピッチ幅（声の高低幅）が重要であることが明らかになったことから、本研究ではマザリーズ表出の判定基準を音声のピッチ幅（声の高低幅）とすることにしました。アンケート及びインタビュー調査も実施し、マザリーズ表出困難な学生の学習効果について検討していきます。今後は最終報告に向けて、録音音声の分析データ結果について検証及び考察を進めて行く予定です。

（文責：児玉珠美）

プロジェクト研究　「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究２」

吉村智恵子㈹・荒川志津代・小泉敦子・宮本桃英・安田華子・磯村紘美

本研究は「子どもの主体性を尊重した保育」に着目して保育実践現場から情報を収集し、学生へ還元していくことを目的としています。28年度は家庭での保育にも範囲を広げ、養育者（母親）が乳児期の子育ての過程で子どもの主体性、自身の主体性をどのように捉えているかという点に着目して検討しました。

名古屋市内民間保育所が開催する子育て支援に参加している０～２歳の子どもを持つ母親20名を主な対象とし、方法・内容に同意を得られた協力者に対して質問紙及び養育のエピソードに関するインタビュー調査を実施しました。語りの内容を整理・考察すると、子育てにおいて母親が自ら決断し、選択し、考え行動に起こすという意味において「主体」となっていくプロセスが見出されました。母親による自分と子ども、互いの主体性を脅かされるような状況についての語りから、母親は、子育て中の自分を「主体」として受け入れるための方略を使って子育てに向かっていることが明らかになりました。

（文責：宮本桃英）

平成29年度プロジェクト研究

「新教育課程に向けた音楽カリキュラム構築と教育法の確立」

稲木真司㈹・佐々木基裕

これまで、学習指導要領はおよそ10年おきに改訂されてきました。昨年12月に中央教育審議会の答申が出されたとおり、文部科学省は次の改訂を幼稚園では平成30年に、小中学校では平成32年に実施するように計画しています。小学校教育における音楽の授業で学ぶ内容は、学習指導要領や解説に述べられていますが、現行の指導要領には、それらの内容をどのように教えればよいのかを具体的に示すメソドロジーは示されていません。中央教育審議会の答申から読み取れることは、次の改訂においてもそのようなメソドロジーが示されることはなさそうです。本研究では、現場において音楽を教える教師にとって必要となる音楽的内容を論理的に系統立てて、容易な内容から段階的に難しい内容へと連続的に教える方法を明らかにしていきます。

（文責：稲木真司）

「子どもの表現と創造性を育むアート教育の指導法の開発」

松田ほなみ㈹・伊藤理絵・河合玲子・神崎奈奈・白石朝子・山本麻美

本研究は、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の５領域の一つである「表現」の目標、「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」に基づき、保育者を目指す学生が、子どもに対して豊かな表現力を育むことができるようになる為には、どのようにすればよいのかを検討していきます。日頃、個々に授業研究を行っていますが、今回、プロジェクト研究として、総合的に研究できる機会を頂くことができました。音楽、美術担当教員を中心に、子ども学、心理学、情報学専門の教員も加わり、子どものアート教育の現状を踏まえ、勉強会を行い、実践を検討し、研究していきます。

（文責：松田ほなみ）

「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究３」

吉村智恵子㈹・荒川志津代・宮本桃英・小泉敦子・安田華子

本研究は、平成27・28年度に継続して行うものです。28年度までの研究では、保育者が記述した保育エピソード、インタビューによって得た乳児をもつ母親の養育エピソードに対する分析を行い、乳幼児及び保育者・養育者の主体性に関する研究を進めてきました。29年度はこれらの分析をさらに深めることが一つの目標です。そして、その成果を学生の学びに活用していくことをもう一つの目標とします。具体的には、保育職に就くことを志している学生が現場での乳幼児理解、保育者の保育行動及び意図などについて保育エピソードを通して学ぶ教材を作成することです。授業等で教材使用による効果を確認しながら進めていくことを計画しています。

（文責：吉村智恵子）

総合科学研究所主催 平成28年度 大学講演会（平成28年9月23日）

「今後の大学教員に求められる資質～再課程認定に向けて～」

講師：無藤 隆 氏（白梅学園大学教授）

白梅学園大学教授の無藤隆先生をお招きし、学習指導要領や教職課程の規則の改変に伴う、中央教育審議会の答申による見直しのイメージについて、最新の情報・状況を講演いただきました。講演では、答申のポイントである、教員養成校に求められる教職課程の改善・質保証、そして学び続ける人たちを育てる重要性から、教員自らの指導についての改善や、業績のあり方も見直しが必要という大学教員に求められる資質について、その背景を含めて詳しく解説していただきました。また養成校としては、幼稚園から小学校、中学校、高校まで一貫させていく「主体的」「対話的」「深い学び」「アクティブ・ラーニング」等についてしっかり受け止め、大学教育のやり方自体を変えていく必要性を再認識しました。その他研修のあり方、幼稚園教諭養成と保育士養成の関係性や教職課程コアカリキュラム等についても解説していただき、本学の教員養成を考える上で重要な視点を学ばせていただいた貴重な機会になりました。講演の詳しい内容は、総合科学研究第11号に掲載されますので是非参考にしていただきたいと思います。

（文責：渋谷 寿）

平成28年度 大学講演会

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂保健所との交流事業「若返りきらきらセミナー」「作ってみよう♪ オリジナルTシャツ」

私は、今回、年代の異なる人たちと接して、話したりすることの楽しさを改めて実感することができました。普段の生活で、自分の祖父母の年代の方と長時間話したり何かをしたりする機会はほとんどなかったので、とても新鮮で、同年代の人と話すのとはまた違った楽しさがありました。作業中も、皆さんとても楽しそうで、気づいたら一緒に楽しんでいました。完成した時の皆さんのうれしそうな顔を見た時や、「ありがとう」とたくさんの方に言っていただいた時は、このイベントに参加してよかったと心から思いました。また、このような機会があったら、参加したいと思います。

短期大学部生活学科１年

瑞穂児童館との交流事業 クリスマスイベント「サンタさんのロケットを飛ばそう／おねえさんの科学ショー」

私たちは、身近なものの不思議を子どもたちが実感できるイベントを行いたいと考え、親子で楽しめるゴムの力を利用した科学おもちゃ作りを行いました。午前の部ではゴムロケット、午後の部では紙皿 UFO を作り、みんなで飛ばして遊びました。また、子どもたちからゴムの性質についての発言も引き出すことができました。

親子で行うことで子どもたちの新たな一面に保護者が気づける機会にもなると、今回のイベントを通して感じました。実際に教育現場でもこのようなイベントを行っていきたいと思います。

文学部児童教育学科４年

オリジナルＴシャツつくり

おねえさんの科学ショー

今年度運営委員

委員長
森屋 裕治 MORIYA Yuji（短期大学部）
伊藤 充子 ITO Mitsuko（文学部）
河合 玲子 KAWAI Reiko（短期大学部）
小町谷 寿子 KOMACHIYA Toshiko（家政学部）
羽澄 直子 HAZUMI Naoko（文学部）

研究所メンバー

所長 渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi
顧問 河村 瑞江 KAWAMURA Mizue
主任 吉川 直志 YOSHIKAWA Tadashi
教授 越原 一郎 KOSHIHARA Ichiro
職員 寺島 まり子 TERASHIMA Mariko

編集後記

ここに総合科学研究所だより第24号をお届けします。ご執筆頂きました関係者の皆様に感謝申し上げます。地域貢献事業では多くの先生方にご参加頂き、さらに次年度の事業にもご協力頂けること誠に感謝いたします。本研究所での研究は、どれも今、そして将来に必要とされていることを捉えたものとなっています。また、大学をとりまく環境が変化し、それへの対応が求められる時代となったことで、研究所に求められるものはさらに大きくなっています。このたよりではほんの一部しかお伝えできませんが、研究所の活動の香りを感じて頂ければ幸いです。今後とも、研究所での研究・事業にご協力頂き、その成果にご期待下さい。

（文責：吉川直志）

名古屋女子大学 総合科学研究所だより
平成29年3月31日 24号
発行・編集／名古屋女子大学 総合科学研究所 〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町3-40 TEL052-852-1111(代)
本誌記事、写真の無断転載を禁じます